

『西周伝』における東西文化の影響

大森周太郎

序論.『西周伝』を研究する理由

これは、あまり知られていないことだが、文豪森鷗外は西周の親戚であり、明治30年(西暦1898年)には『西周伝』という伝記を書いている。森鷗外の著作の中に、直接西周の後を継いだといえるものはないとはいえ、学問のための学問を認めたり、外国語を学ぶ際、語源まで遡って覚えたりする態度は西周と共通しているが、これは当時としては斬新なものである。これは、細かく指導を受けた結果というより、何らかの感化を受けたことによるらしい。

西周も森鷗外もともに幅広い関心と高い素養を持ち、明治にあつて外国の学問や文化を翻訳紹介して大きな啓蒙的役割を果たし、のみならず独自の立場を模索した人物である。そうしてみると、この2人が互いを評価し、組んで仕事をしたり相互補完的な仕事を行なったとしても不思議はなく、鷗外の『西周伝』にこの先達に対する賛辞が溢れていたとしてもやはり不思議ではなからう。しかし、実際にはそうしたものは見られず、幾つかの奇妙な特徴が見られるにとどまっている。

森鷗外には全部で16篇の伝記があるが、そのほとんどが一般的な伝記のイメージにぴったり重なるものといつてよい。中心人物の心情の推測も随所でなされており、誰かが新たに登場するたびにその人物の履歴を書きつらねたりということもない。鷗外はその気になれば伝記作家としての手腕も発揮出来たのである。これらの伝記と『西周伝』の作風を比べれば、『西周伝』のそれは何とも風変わりであり、この違和感ゆえか、『西周伝』は不出来であるとか鷗外は気乗りせずに書いたなどと言われることが多い。というのも鷗外が離婚したとき、媒酌人の西周に出入り禁止を申し渡されたため、西周の伝記を書くときも気乗りしなかったというのである。しかし、真相はそうした措置は取られず、鷗外の方で出入りを遠慮しただけだったことが明らかになっている。

他にも鷗外が西周を嫌っていたという推論がなされてきた。1つ目には『灰燼』に出てくる登場人物の谷田と山口節蔵のことである。この2人は、それぞれ西周と鷗外であると言われているが、節蔵は谷田のことを好意的には思っていない。しかし、この作品がノンフィクションのようなもので、鷗外の実体験をそのまま書いたものだと思えるだけの根拠はない。『灰燼』には節蔵の神経が他の人間とは違うことを示すためのくだりが多々見られ、描写その他からこの個所もまたその一つであることからすれば、この部分が西周に対する鷗外の思いをそのまま示した部分であるとはますます考えにくくなる。何より谷田という人物と西周の共通点がそれほどない上、『灰燼』には谷田(つまり西周かもしれない人物)が節蔵(鷗外かもしれない人物)から挑発的な言葉を浴びせられ、そのことを妻に話すくだりもあるが、そこでの谷田の口調はむしろ面白がりながら節蔵を評価しており、そこから谷田自身の立腹や不快の念は読み取れない。以上のことから尊敬すべき人物として浮かび上がってくるのはむしろ谷田(つまり西周かもしれない人物)の方であり、そこには親切心と寛容さが感じられる。つまり、谷田が西周そのものであったにせよそうでないにせよ、鷗外はこの人物を好意的に扱っているのである。鷗外の日記には、晩年、父の墓に行った際、西周の墓にも詣でた旨があるが、これは敬意を欠いた相手にすることではない。3つ目に、鷗外自身が西周のことを

椋鳥のようなぼんやりした人物と述べたという点である。しかし、鷗外にとって椋鳥とは、表面上静かな中に感受性の豊かさ、容量の余裕を秘めたものとして言及されることが多く、鷗外が比喩として椋鳥を挙げたのは、好意の表れであると思われる。実際、その個所に続いては西周の「偉大な所」についての言及があり、それに続いて「面白いと思つた」とある。これは後年の小説や史伝の書き出しによく見られる文章である。最後に、鷗外が西周は脱藩者であつたため、鷗外は西周に不信感を抱いていたという見解がある。儒教的な献身に高い価値を与えていた鷗外にとって脱藩とは許しがたい行為であり、そうした考えを裏付けるような例も身近にあつたというのである。しかし『西周伝』には、まさにその人物の死について考証風に扱った箇所があり、他にも脱藩者についての好意的な扱いがあるためこの説は支持できない。このように『西周伝』の出来の悪さを、鷗外が西周を嫌っていたことに求める議論はいずれも満足のものではない。

『西周伝』が出来なかった理由の1つは、『西周伝』が明治31年の3月から10月という短い時間で書かれたことである。これは記念出版に間に合わせるためという外的な事情によるものであつて、別段、鷗外自身が望んだことではない。もう1つの理由は鷗外の作風そのものに求められる。『西周伝』の奇妙な特徴こそ鷗外が後に史伝で見せることになる特徴ではないか、という見方も成立するのである。もし『西周伝』が鷗外の習作もしくは失敗作であつたのなら、『西周伝』に見られる特徴の多くは後に書かれた成功作とは違つていなくてはならないことになる。しかし、本筋とは関係の薄い公証や、細かい日程などへの数多くの逸脱や、論評の不在、資料への全面的な依拠などはむしろ鷗外の鷗外たるゆえんとすらいえるものだ。そうして見ると、この作品を通常の評伝のようなものと看做してその出来栄を批判すること、このこれまでのアプローチは誤りで、初めて『西周伝』や彼の史伝を読んだときの当惑こそが鷗外を理解する鍵ではないかという仮説がでてくる。実際『西周伝』は技術的な欠陥をいくつか含んでいるとはいえ、鷗外の作品中、読者に鷗外らしさをもっともあからさまに示しているものの1つであり、それがこの作品の強みおよび価値になっている。その場合、どこからどこまでが時間不足による欠陥で、どこからどこまでが鷗外らしさを示している部分なのかを明らかにしなければならないことになる。

1. 『西周伝』の特徴

『西周伝』の奇妙な特徴は大体7つほど挙げられるが、それらを並べていくと以下ようになる。

① バランスの問題点。

重要度においては同じ程度の時代が、あるものはほとんど資料の丸写しといつてもよい形で延々と続いているかと思えば別のもは簡潔に書かれている。

また、『西周伝』の内容を年代別に分けてみると、採用されなかった慶喜への書状とオランダへ向かった部分とが不釣合いに場所を取っている割に、兵部省出仕時代以降の、著作の発表や講演を次々に行った、つまり最も重要な時代についてはほんのわずかしが触れられていないことが分かる。「蘭英学修行時代」にせよ「オランダ留学時代」にせよ西周の活躍という点からすれば序章であり、この部分だけで全体の4割を占めているのは、少なくとも奇妙と言わざるをえない。

②西周の思想や人間像についてまるで取り上げられていない。『西周伝』には彼の手記や回想録などからの引用も多いものの、そこから西周が熱意に燃えた親切的な人物であったことは分かっても、それ以上の特別なことは見えてこない。論評や考察など、彼の業績に関しては一箇所もないのである。その結果、西周の思想も人間像も見えてこない。

③旅行の日程や会った友人の名前のような全く重要ならざる記述が不必要といってもよいほど多い。ことに西周晩年になると、西周がどこに旅行したか、日程はどんなであったか、そのときどんな知人に会ったかということに関する記述が目立つようになる。『西周伝』から、西周の人物像や活躍ぶりを見て取ろうとした読者は当惑するであろうと思われる。あたかも交遊録のようなこうした記述の連続は、それでなくともどんな意味があるのか疑わしいというのに、そうした部分の方に力が入っており、より重要な事柄に関する記述は欠落して見えるからである。

④西周の業績に関する記述が乏しい。最も目立つ記述は寄付金に関するもので、次が講演であり、著述等にも触れてはいるものの、十分だとはいえない。『西周伝』自体は、記念出版の一環として西周の業績を称えるために書かれたものであることからすれば、これは全く奇妙なことである。結局、彼の業績は、伝記の末尾に付録として年表のような形で取り上げられてはいるものの、本文中に十分組み込まれてはいないため、読者に、生きた人間西周がこれらを成し遂げたという印象を与えるには至らない。

⑤時代に関する記述が不足している。『西周伝』の舞台は激動の時代であり、西周はその中で大きな役割を果たした人物である。従って、時代の移り変わりそのものを追ったり、変化の予兆のようなものを示したり、あるいはこれは業績と多分に重なるが、時代の中での西周の位置を書いてもよいし、伝記としてはむしろその方がふさわしいのだがそうした記述は非常に少ない。目立つのは、思うにまかせぬ時代の中で西周が不本意な時期を過ごしたというくだりが何度も出てくることである。ただし、戊辰戦争など、いくつかの出来事に関してはかなり細かく書き込まれており、臨場感もある。

⑥様式が統一されていない。例えば、オランダから帰った周が京都に行った辺りから江戸に行くまでの間にはいかにも歴史小説風に切迫したやりとりが見られ、別の部分では史伝風に家柄を昔まで遡っているかと思えば、ある部分は旅行の日程の羅列、ある部分はただ人名の紹介、またある部分は評伝風という具合で全体の統一が取れていない。

⑦なぜ登場するのか分からないエピソードが数多く見られる。西周が酒に酔ったおかげで地震に見舞われず、圧死せずにすんだことや、留学の話がなくなりかけたりその度に話がまた持ち上が

ったりしたことや、はしかで死んだ留学生などのエピソードが多い。これらのエピソードが何を意味するのかはほとんど理解不能であるが、無理にでも意味を読みとろうとすると「西周自身をはじめ、人の運命が偶然に左右されていることを示唆している」ということにもなりかねない。また、西周が浮かぬ日々を送ったことなどが列挙されたり強調されたりしている。

これらの特徴からこれまで『西周伝』は失敗作だといわれてきた。確かにこの作品には構成上の問題をはじめとして複数の欠点がある。

2. 鷗外作品の特徴および、そこに見られる東西文化の影響

鷗外の理想は、ハルトマン、メーテルリンク、リルケ、ゲーテなどから強く影響されたものである。ハルトマンの哲学は『無意識哲学』と呼ばれるもので、世界の背後では必ずしも論理的ではない、ある精神がはたらいている、とするものである。鷗外はこのハルトマンの説をたびたびとり上げ、自身の美学論の中に引用したり、ハルトマンの『美の哲学』の概要を『審美綱領』として出版したりしている。劇作家のメーテルリンクは『青い鳥』の作者として有名であるが、その作風は象徴主義と呼ばれ、やはり、世界の背後には何らかの精神がはたらいている、とするものである。メーテルリンクの作品では科白が隠された意味を持つことが多く、それは哲学的な内容を持っていたり話の展開を暗示していたりする。

一見無秩序と見える様々な現象の背後には何らかの理由ないし法則があり、それが解明可能なのだとするのであれば、そこには楽観的な響きがある。これはちょうど、雲の動きから数日後の天候の変化が予想できるようになり、農作業や漁に活かせるようになった、というのに似ている。実際、メーテルリンクの作品には、智慧によって運命に打ち勝つことが出来る、とする内容のものが存在する。ハルトマンも、歴史の流れの中で道徳意識なり美意識なりが進化していく様を記述することに主な興味を向けてはいるものの、後期にはそうした現象の背後に潜むものへ目を向けている。

このような方向への探求は、後に現象学や新カント学派の一部によってさらに進められており、事実、現象学者にはハルトマンを自らの先駆者の一人と見なす向きがある。ところが、鷗外にあってはそうした探求はなされず、背後で動く運命は読者にのみ明かされ、登場人物はそれを知えないがゆえに悲劇的な結末をむかえる、という例が大変多い。『生田川』では主人公が自分の置かれた状況を理解する、ということになってはいるが、この話は2人の求婚者のどちらをも選びきれなくなった娘が姿を消すというものであり、果たしてこれが明るい結末といえるかどうか疑わしい。

世界がこのようなものであった場合、2つのことが問題となる。1つは、そのような世界の中において人はどうすればよいのか、ということであり、もう1つはそのことを登場人物はどのような形で示しているのか、ということである。それに対する鷗外の答えは、意義とて定かならぬ規範の形骸を遵守すべしというものである。その規範の意義および遵守の意義がどのようなものであるかについては考えられることはない。何やら世界の本質とかかわる意義があることが暗示されはするもの、

それがどのようなものであるかは明らかにされないのである。鷗外の作品には、そうした境地に達した人物を描いていると思われる作品がいくらか見られるが、それがどのようなもので、そうすれば達成されるものなのか明らかにされることがないため、結果として盲目的な信仰とでもいうべき形をとることになる。

こうして鷗外の作品には、偶然によって翻弄される運命の不条理さを描いたもの(例えば『阿部一族』『大塩平八郎』『堺事件』『雁』など)と、規範に従った献身の姿勢を描いたもの(『安井夫人』『山椒太夫』『ぢいさんばあさん』『最後の一句』『高瀬船』など)との2つが登場することになる。しかし、ここで問題となるのは、こうした対処法が世界の仕組みに関する鷗外自身の見解と矛盾しているということである。世界の世界の仕組みについて知りえないのであれば、どんな方向を選ぼうと自分がどこへ進んでいるのか知りえないことになる。だとすれば、どんな道を選ぶとか選ばないとかということには意味がないということになるからである。もっとも、これは暫定的な立場だったのであって「鷗外の出した結論」ではないとする向きもある。池内(2001)は、鷗外の立場を、日本ではそれまでの規範や生活上の形式の意味内容は失われたが、だからといって社会や生活を維持するという規範や形式の意義まで捨てられてしまっただけは世の中が崩壊してしまうので、新しい形式が生まれて意義の根本が回復されるまでは古い形式で行くべきである、というものと述べている。しかしその一方で『寒山拾徳』では逆に盲目的な信仰が風刺されており、鷗外は自ら定めた立場に安住しきれていないように見える。明らかに鷗外の理想は一貫したものではなく、体系として見るには随所に矛盾が隠せないのである。鷗外自らが、自分は形而上学的方面が苦手だと告白している。

ここで、なぜ鷗外はこのようにある意味一貫しない作風をとったのかという疑問が浮かぶ。鷗外の近代以前にあっては、社会の枠組みも人がその中ではたすべき役割も固定していた。そのため、そこにどれほどの不都合が生じようとも、疑問一つ挿まれることもなく社会は動いていた。ところが明治に入ってこうした機械性が崩壊し、そのことによって人は何をどうしたらよいのかが分からなくなった。そこに西洋から、世界には何かしら「普遍的な」価値なるものが存在する、という考えが伝わって来た。そのため、明治時代の日本人の内何人かはこの「普遍的な」価値というものを受容しつつ、その中に自らをどう位置づけるかという問題に取り組むことで、何をどうしたらよいのかという問題に取り組むこととなった。その中で、とくに自覚的だったのが鷗外だったとされている。まさしくここには西洋近代と江戸文化という異文化の交流ないし軋轢が見られるのである。

鷗外の時代には科学やヨーロッパの影響により道徳や規範といったものの根拠が失われてきたのである。例えば、戦前の日本では天皇家中心の神話が国をまとめる役割を果たしていたが、科学的に検討されれば、こうした神話は簡単に崩れ去ってしまう。そうなると、社会や人生も崩れ去ってしまうことになる。鷗外や漱石が直面した問題の一つはこのようなものであった。しかし、問題はそれだけではなかった。それまでの人間は決まりきった約束事の中で暮らしていればよかった。この約束事がどれほど不合理で理不尽なものを含んでいようとも、ただ決まりきったことを機械的に遂行し、その中で人生を謳歌していればよかったのである。ところが、明治になってそれらの機械

性が一挙に崩壊してしまった。人はもうどう暮らしてよいか分からないというだけでなく、世界がどこに向かうのか、善行は報われるのか、死んだ後はどうなるのかということまで分からなくなってきた。このことは、一方では行動規範への渴望、一方では世間に対する嫌悪となって現れる。例えば『青年』という作品には、日本人は生きるということをそもそも知っているのか、とそうした不確かさを訴える箇所が散見される。『かのやうに』という作品では社会や義務を維持するには崩れ去ったそれらの基盤があるふりをするべし、という主張がなされ、続く作品である『吃逆』では解決を宗教に、それも特定の宗教ではなく進歩を奉じる宗教めいた普遍的な何かに求めている。それに続く『藤棚』は、内容的には『かのやうに』を繰り返したものであり、ここでは、旧秩序を破壊しようとする解放運動が道德そのものを失わせる結果になるのではないかという一方で、古い秩序の偏狭さも指摘されており、結論らしきものは出ていない。

結局こうした問題の解決は、日々の要求を遂行することによってもたらされるということになったらしい。こうした考えの背後にはヨーロッパの影響が強く見られる。というのも、自律的、主体的な精神が因襲的に美德とされたことを盲目的に行なう、というのは、崩壊しかけた規範を維持しようとするときよく見られる対応であって、例えばトルストイの『パアテル・セルギウス』などにも見られる。ともあれ、日々の要求を遂行するという発想自体は『カズイスチカ』に見られ、そこでは人生が些事の連続であるため意義を感じられないのであれば、その中にこそ意義があるかのように盲目的に信じようとする立場が見られる。一方、『鶏』では俗世間への嫌悪という側面が現れている。主人公は利己的本能につき動かされる者達に囲まれながら、超然としていつも微笑しているのだが、傍観しているだけというわけでもない。虎吉という男は他人のものは自分のものという経理法に従って行動している。女中の婆さんは虎吉の悪口を言いながら、自分は自分で家の物を持ち出している。これと対照的に主人公の無欲さが浮き彫りにされてはいるが、婆さんの目にこれは馬鹿で吝嗇に映るのみである。主人公は、欲の世界に不快感と距離感を感じている。はびこる不正を肯定することは出来ないので不正を除く手はそれなりに打っているが、あまり深い関わり合いになることは望んでいない。

『かのやうに』や『青年』で行なわれた、規範というもののあやふやさに関する考察や、『鶏』における俗物嫌悪を読んだ者なら、次の『灰燼』を予想出来たであろう。それは道德的退廃に陥った人間の話ではなく、社会や人生を肯定する根拠を失った者が、世間の軽佻浮薄さに頭を痛める小説である。『灰燼』の随所に一般人に向けられた皮肉で無関心な視線が見られ、明らかに節蔵はそうした社会を嫌っているが、彼は激怒しているわけでも絶望しきっているわけでもなく、また、優越感に浸りきっているわけでもない。また、『金毘羅』という作品では象徴的な技法が大幅に用いられており、後述するハルトマンやメーテルリンクの影響が露わになっている。そうした要素は『かのやうに』や『灰燼』では影をひそめるが、歴史小説などで再び表れることになる。この『金毘羅』では子供の死にからめて運命の不可解さが描かれており、様々なエピソードが話の進行を暗示する伏線として機能しているため、一見して運命を理解し解きほぐす話のようにも見える。しかし、主人公達がその事を理解したり、今後の暮らしに応用したりすることはない。結局何かを理解する

のは読者だけであるが、理解したものという運命の不思議さだけなのであるため、作品自体は一種の不可知論といえることができる。『雁』という小説は運命というものを主題にしている作品である。この話自体はなんとも意味の見えない小説であるが、偶然によって人の運命が左右されるということと、象徴的な手法が話の中で大きな役割を果たしていることは後の歴史小説とも共通した特徴である。ここでは、鯖の味噌煮、雁、岡田の外遊がそれに当り、象徴的な手法は雀や雁のエピソードなどに見られる。また、この小説においては筋書きそのものよりも、当時の雰囲気や風俗が細かく描かれており、これも後の史伝と共通している。

鷗外の歴史小説はこれらの内容を引き継いで、偶然によって翻弄される運命の不条理さを描いたものと、規範に従った献身の姿勢を描いたものの2つに分かれる。『阿部一族』『大塩平八郎』『堺事件』が前者に、『安井夫人』『山椒太夫』『ちいさんばあさん』『最後の一句』『高瀬船』が後者に当たる。

前者の作品群に共通していることは、話の発端においては何の悪気もなかったこと、偶然が重なったことによって悲劇が引き起こされるということ、文献に大きく依拠していることの3つである。これらの作品が、為政者の過ちと民衆の犠牲について示したのだという向きもある。しかし以上のことから分かるのは、もしこの作品に何らかのテーマがあるとしたら、それはロシア文学の一部のように遅れた体制を批判するものでもなければ、失われた大和魂を礼賛してその復古を唱えるものでもなく、むしろ不条理文学に近いものだといえる。

一方、鷗外の他の歴史小説には日々の要求をこなしていく献身の姿勢が目立つ。とはいえ、この2つが互いに矛盾した傾向であることは少し考えて見れば分かる。世界や運命が不条理なものであったとしたら献身も美德も何の意義があろう、というわけである。鷗外は、これに対する答えを既に出している。つまり、問いを発することなく盲目的に献身せよ、というものである。それらの小説は美德を忠実に履行した行動を称揚するものであるが、一方でその美德がなぜ良いものであるのかについての言及なり分析はない。また中には、『最後の一句』や『山椒太夫』のように、優れた人物がせっかくの素質を浪費した、としか言いようがない話もある。『護持院原の敵討』もこれと同じ系統の話だと思われるが、敵討ちを扱ったこの話では、分析や検討を拒否することで、制度や置かれた状況に対する異議を一切封じ込めてしまうような姿勢さえ見られる。こうした立場とはどのようなものかという、前述のように、運命には一応のメカニズムはあるもののそれは前もって知ろうとしても出来るものではない、とするものであり、そうした世界の中で意義とて定かならぬ規範の形骸を遵守すべしというものである。だが、鷗外は盲目的な信仰に甘んじられる人ではなかったため、そうした立場すら信じることが出来なかったらしい。このような次第であるので、唐木(1974)が、鷗外にはもろもろの観念形態を人生の悲慘をかくす緋色のエナメルと見、また自己欺瞞が世界史を動かす最も根源的な力だと見ていたところがある、と述べているのは不思議でも何でもない。

要は、鷗外にあっては物事に解決策を提示するよりも「傍観者的な態度」に徹しており、それが世の混乱や日本と西洋の相克に対する彼の対処方だったのである。こうした態度については、理

解しようとするよりむしろ当惑したままにいる方が適切な対応なのかもしれない。ここで鷗外が行っているのは、ある価値観を称揚するために実例を挙げはするものの、その価値観がなぜ優れているのかと聞かれても「昔こうだった」と言う以外、口をつぐむことなのである。

こうした特徴は、後年書かれた史伝ではさらに強まり、これはタイトルこそ人名をとっているものの、中心人物よりも出来事の連続や時代の流れといったものの方に重点が置かれている。しかし、時代の流れといっても、進歩や改善というより、騒乱や没落をもたらす単なる変化として捉えられ、時代のうねりの中で登場人物が活躍したり、あるいは来るべき時代の気配を感じ取ったり、語り手たる鷗外が時代の変化について論じたりということはない。かつての作品に見られた形而上学的格闘は姿を消し、登場人物達は外界に振り回される存在となっている。ここには、かつての歴史小説群に見られた、不可解な運命に翻弄される人物達と共通した要素が見られるが、問題は史伝に見られるこれらの新たな特徴が、歴史小説群で扱った問題の解決を示唆していないということである。先に述べたように、かつて鷗外は、不可解な運命に対して、運命の仕組みを理解し切り抜けるという樂觀性を見せることがなかった。そのため歴史小説の内容が、悲劇的な状況の中で精一杯生きた人間達を描く、といったものであったことは史伝の内容としっかりつながっている。しかし、一方で鷗外は明治24年には、実生活から抽象したところに理想あるいは美と呼べるものがあり、現実世界は没理想界である、とはっきり述べている。また、明治32年には『審美綱領』で、同じような思想を紹介している(『西周伝』はその間の、明治30年に書かれている)。こうした発言を単なる理想主義とのみ受け取るべきではない。なぜなら、「美」や「理想」というと、確かに善悪の問題や理想主義に関係した事柄を連想させかねないが、この発言の自体は、抽象的な定理や法則といったものについての言及も含んでいるからである(いうまでもないことだが、「理想」の原語は「イデー」である)。この発言の内容には、世界に厳密に正確な円が1つもなかったとしても円の概念や円周率の数値は存在するといったことも含まれているのである。

3. 森鷗外後年の作品と『西周伝』との共通点および相違点

これら史伝および鷗外の諸作品の特徴と『西周伝』の特徴との間に共通点があることは以上のことから明らかである。ここで、『西周伝』の奇妙な特徴をもう一度列挙してみる。①重要な時期に関する記述が少なく、瑣末な時期の記述が多い。②西周の思想や人間像についてまるで取り上げられていない。③旅行の日程や会った友人の名前のような全く重要ならざる記述が不必要といってもよいほど多い。④西周の業績に関する記述が本文中に乏しい。⑤時代に関する記述が不足している。⑥様式が統一されていない。⑦なぜ登場するのか分からないエピソードが多い。これら7つのうち、②、③、④、⑤に関しては、はっきり後年の様式を先取りしたものということができる。こと⑤に関しては、思うにまかせぬ時代の中で西周が不本意な時期を過ごしたというくだりが何度も出てくると、いくつかの出来事(例えば戊辰戦争)に関してはかなり細かく書き込まれており、臨場感もあることなど見落とせない類似点といえる。史伝でも、時代の雰囲気や主人公たちの

苦勞についての記述は散見されるが、時代の動きや歴史観に関する記述は少ないのである。また、記述量のバランスが時間的なものと一致していないことは、双方に共通した点である。

史伝の特徴をもう1度挙げてみると、①中心人物以外の事柄にまで及ぶ言及②歴史の流れ③時代細部の明確化④資料への大幅な依拠⑤冒頭で示される中心人物への関心⑥主人公の業績言及の不足⑦新しい人物が出るたびに注記し、何か起こるたびに当人および周囲の年齢を書くこと⑧不十分な人物描写となるが、これらを『西周伝』と比べてみると、③、④、⑥、⑧が共通しており、①、②、⑦も不十分ながらわずかに顔を出していることが分かる。では⑤はどうかというと、これは史伝が新聞に掲載されたものであったため行なわれたことと思われる。一応、史伝は新聞読者の関心をひきつけねばならなかったわけである(結局それは成功せず、これら史伝の連載はすこぶる不評であったのだが)したがって、『西周伝』のように、はじめから読者は親族や知人に限られており、しかもそれらの読者が熱心に読むであろうことがあらかじめ予想されている場合は、こうしたことは行なわれなかったことが推測される。『西周伝』が多くの点で鷗外後年の作風を先取りした作品であることは以上のことから明らかである。

このような、史伝における、統一的な視点を欠いた出来事の羅列に何がしかの意義を読み取るならば、それは様々な世界観から抽象された視点、すなわち世界観(もしくは歴史観)の放棄といったところが妥当かと思われる。ところが、『西周伝』を書いたころの鷗外は、世界観(もしくは歴史観)の放棄とは異なり、ハルトマン風の世界観を持っていた時期にあたる。これは、厳密にいうとハルトマンやメーテルリンクの世界観とは異なるものだが、世界には何がしかの意味があるがそれがどのようなものかは知りえない、とする考えであった。したがって、『西周伝』の随所に後年の史伝風の書法が見られるとしても、作品の理念としては史伝流の、統一した世界観の放棄、というものよりもハルトマン風のもの(もしくはそれに近いもの)が見られてもおかしくはない。具体的にいうならば、資料に大きく依拠し瑣末な事柄の記述が多いところまでは史伝風でもあるが、それと同時に、作品の中心には出来事の流れの背後に何かしらの意味(それも不条理なもの)を見て取ろうとする、史伝には見られない姿勢があってもおかしくないということである。そこで現実の『西周伝』ではどうなっているかというと、歴史という舞台の上でハルトマン風の世界観をどうにかして表現しようとした跡が見られる。実際、『西周伝』には、西周を時代を積極的にリードした人物というより、むしろ時代に翻弄された人物として捉えているのではないかとすら思える箇所がある。一見して、これらの特徴は、鷗外が西周に好意的でなかった証拠として受け取られかねないものである。西周の伝記を書くにあたって、激動の時代にあたって大きな足跡を残した偉人として描くことが好意の表れだとするなら、そのような見解も成立するであろう。しかし、これらの特徴は実際にはいずれも人間は不可解な運命に翻弄される存在である、とする見解が現れていることを示しており、そのことは好意の有無とは関係がない。しかし、これらの列挙や強調は全篇にわたって徹底したやり方ではない。時々、そのようなエピソードが部分的に見られるだけである。それではなぜ徹底していないのかということになるが、これまでの議論に従うならば、鷗外としては徹底した

やり方で書き上げたかったが、それが出来なかったということになりそうである。つまり、徹底したやり方で書き上げるには時間が足りなかったか、ゲラの段階でクレームがついたかのどちらかである。

しかし、『西周伝』に不完全な点が残っている事実である。例えば日記や手記、証言の羅列が杜撰なやり方でなされていることと、量的なバランスの悪さがそうである。作品の不完全さについて、岩波書店の全集では「時間が足りなかったからそうなった」と見ている。『西周伝』が明治31年の3月から10月という短い期間で書かれたものであり、それが本人の意向と無関係だったのは事実である。それでは、十分な時間のもと執筆がなされた場合、作品はどのようなものになっていたかを推測してみると、以下のようなものになる。

- ①作品全体の長大化(おそらく、長さは今のものの数倍に及んだであろうことが予想される)。
- ②日記をはじめとする資料の引用のさらなる増加。
- ③微細な細部にわたる言及。
- ④新しく誰かが登場するたびの、その人物の履歴紹介。
- ⑤運命の不条理さ不可解さを感じさせるエピソードの増加。しかもこれは全篇にわたって登場するであろう。

あるいはこれに加えて、西周に関する何らかの見解もうかがい知れるような部分も僅かながら見られるようになっていたかもしれない。しかし、それが伝記の中心となることはなかったであろうと思われる。

結論

以上のように、『西周伝』に見られる奇妙さのうち、ある部分は欠陥であり、またある部分は後年の様式を予告するものとなっている。その様式とは、人生は不可解な仕組みによって動かされており、人はその中で翻弄されるながらも日々の義務を果たしつつ生きていかねばならない、とする世界観を反映したものであり、それは彼の多くの作品中に見て取れるものである。実際、『西周伝』では、不可解な運命に翻弄される人間、といった視点が随所に見られる。また、考証の仕方や周囲の人物の扱い方なども鷗外後年の作品と共通するものが見られる。彼のこうした世界観は、日本と西洋両方の文化が交錯するという状況に強く影響されたものである。簡単に言えば「不可解な」というのが鷗外独自の個性、「仕組み」というのがハルトマンやメーテルリンクなどの影響、「日々の義務を果たしつつ生きていかねばならない」というのが東西両方の文化に影響された結果である。

参考文献

- 唐木順三 1974 鷗外の精神 筑摩書房
松本清張 1994 両像・森鷗外 文藝春秋
山崎一穎 1972 森鷗外・史伝小説研究 桜風社